両側同時性顔面神経麻痺の1症例

横田 昌也・楠本 健夫・木下 和也・田端 敏秀

A Case of Bilateral Simultaneous Facial Palsy

Masaya Yokota, Takeo Kusumoto,
Kazuya Kinoshita and Toshihide Tabata
(Wakayama Medical College)

Bilateral facial nerve palsy is a rare disease. In the past 30 years only 11 cases of bilateral simultaneous Bell's palsy have been reported, and only three were completely simultaneous.

This is a case report of bilateral complete simultaneous Bell's palsy.

The patient was a 27-year-old man. On March 18, 1984, he noted facial nerve palsy that occurred simultaneously on both sides. He visited us with a complaint of difficulty in talking on April 24, 1984. Bell's palsy was diagnosed, because physical findings and laboratory examinations showed no evidence of systemic diseases. About 6 months after onset, his palsy had subsided almost completely bilaterally following conservative treatment.

Key words : Bell's palsy, facial palsy, bilateral facial palsy, facial diplegia

はじめに

両側性顔面神経麻痺は、一側性麻痺に比較して稀な疾患であるが、なかでも、両側同時性ベル麻痺は、本邦において今だ少数の報告例しかない。

最近著者らは、非常に稀な両側完全同時性ベル麻痺の一症例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

症 例 27歳，男性

主 訴：構音障害

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：特記すべきことなし。

現病歴：昭和59年3月13日，発熱，関節痛出現し，近医内科受診，投薬を受ける。3月17日に両側耳痛と右眼充血出現。3月18日，仕事を休んで自宅で寝ていたところ，夕方起きた時，

両側の顔面運動が消失し，顔面浮腫，口腔粘膜及び舌の異常に気づいた。この時，本人及び家族も顔面の左右非対称を認めていない。翌19日，近医内科受診しカゼ症候群として，投薬を受けたが効果なく，口腔外科を紹介され，口内炎の治療をうけた。この時，ヘルペスの所見は認められなかった。しかし，顔面の運動は消失したままで，構音障害も変化がないため，4月

24日当科を受診した。

現症：顔面は軽度浮腫状で仮面様，顔面運動スコアは左右とも4点ずつ（40点法にて，安静時非対称の項目を除く36点満点）であった。両眼瞼は閉鎖できず，前額のしわよせも両側とも不能であり，口角にも動きはなかった（図1）。

両側の耳介，外耳道，鼓膜に異常所見なく，その他の耳鼻咽喉科的視診でも異常はなかった。前医で指摘されていた口内炎も消失していた。

顔面神経以外の脳神経は異常なく，腱反射も正常で，病的反射も認めなかった。全身所見にも特に異常を認めなかった。

検査結果：一般検血異常なし。肝機能，腎機能，電解質すべて正常範囲内であった。尿検査正常，血糖も正常であった。ツ反7×6mm，Paul-Bunnell 反応（-），ウィルス抗体価（インフルエンザA，B，アデノ，ムンプス，単純ヘルペス，帯状ヘルペス）上昇をみとめず。胸部X線写真，耳X線写真，頭部CT異常なし。前庭機能検査異常なし。聴力正常，Tympanogram A型。

シルマーテストでは右8mm，左6mm，アブミ

骨筋反射は両側正常，電気味覚検査は右20dB，左6dBであった。NETは両側無反応であった。

診断：両側完全同時性ベル麻痺

治療と経過：治療と顔面神経麻痺の経過を図2に示した。4月24日，初診時より，低分子デキストラン，ストラーゼ，メチコパール，ビタミンB₁₂を点滴にて投与し，また，経口にてピタノイリン，カルナクリン，メチコパール，ATPを投与した。同時にステロイドの漸減療法を行なった。しかし，効果がないため，6月6日入院の上，6月7日より星状神経節ブロックを毎日両側に施行した。また，6月20日より低周波療法も行なった。

発症後4カ月経過した7月中頃より，顔面運動スコアは回復を始め，左右多少のずれはあったが，9月13日現在，左34点，右30点まで回復した。

治療後の顔貌を図3に示す。左に比べ，右の口角の動きは，まだ多少回復がおくれているが，著しい回復を示し，完全閉眼が可能となった。また，額のしわよせも可能である。

初診時

安静時

強い閉眼
イーと歯をみせる

図2 経過と治療

治療後

図3

考 察

両側性顔面神経麻痺は全身的系統疾患に関連して発症することが多く¹⁾²⁾³⁾、鑑別診断が重要となるが、著者らの症例では、何ら系統的疾患を認めず、ベル麻痺と診断した。また、本人および家族も顔面の麻痺に左右差を認めておらず、両側完全同時性ベル麻痺であると考えられる。

中村ら⁴⁾⁵⁾は、顔面神経麻痺の特異例を経過から表1のように分類し、統計的に研究した。全顔面神経麻痺1856例中、両側性が42例、その内ベル麻痺が1094例で両側性ベル麻痺が27例、両側同時性ベル麻痺(2週間以内)が5例であったと報告している(養和田の報告⁸⁾を含む)。

表1 顔面神経麻痺の経過から見た特異例の分類

一側反復性

両 側 性 { 両側同時性
 { 両側異時性 { 両側反復性
 { 両側交代性

その他, 両側性ベル麻痺の頻度に関する報告は少なく, 玉置ら⁹⁾は, 全顔面神経麻痺705例中, 両側性12例, 両側ベル4例, 小林ら²⁾は, 230例中両側性8例, 両側ベル1例と報告している. 両側同時性ベル麻痺は中村らの研究以外にまとまった報告はなく, 非常に稀なものであると考えられる.

過去30年間に, 本邦において報告のあった両側同時性ベル麻痺の症例を表2に示した.

中村ら⁴⁾⁵⁾は, 両側同時性の定義を1週間が適当とした. また, 安田ら¹⁰⁾は, 同時性を2週間以内としている. その他, 井野ら¹³⁾は1週間とし, 玉置ら⁹⁾は1か月以内としている. 両側同時性ベル麻痺の症例について考えてみると, 表2に示した11例において, 藤田らの症例2は発症間隔の記述がなく, 玉置らの症例4は詳しい記述がなく, 1か月以内としか報告されてお

らないため, この2例を除くと, 9例中7例までが1週間以内に発症している. 残りの2例も, 上出らの症例10は, 後述する両側同時性ベル麻痺の経過から考えて特異な症例であり, また, 岩永らの症例9も, 彼ら自身が同時性, 異時性の中間に類する同時期に発症した症例と考えており, 著者らは, 両側同時性の定義として1週間が妥当ではないかと考える.

両側同時性顔面神経麻痺の経過については, 安田ら¹⁰⁾や武藤¹¹⁾が図4-a, b, cのごときシェーマを示している. 両側同時性ベル麻痺について考えてみると, 表2に示した11例のうち, 両側完全同時性の3例を除いて, 経過の詳細な記述のあった6例中5例(症例3, 5, 6, 7, 9)がb型を示し, 症例10の1例のみがc型を示した. このことは, 片側性ベル麻痺の非麻痺側においても, 筋電図学的に異常所見が認められること¹⁷⁾¹⁸⁾と関連して, 興味深いことである. つまり, 片側性麻痺と考えられていた中にも, 潜在的両側性麻痺が存在していることを示している¹³⁾(図4-d).

以上のことから, 左右の顔面神経の易受傷性の違いが, 両側同時性ベル麻痺の発症間隔の違

表2 両側同時性ベル麻痺症例

報 告 者	発症年	年令	性	発症順序	期間	治 療	予 後
1) 楠 井 ⁶⁾ (1958)	1958	33	女	同 時	0	保 存 的 療 法	治療中だが良好
2) 藤 田 ⁷⁾ (1963)	1962	63	女	右→左	—	保 存 的 療 法	良 好
3) 養和田 ⁸⁾ (1967)	1966	31	男	左→右	6日	保 存 的 療 法	右1ヵ月で回復 左3ヵ月で回復
4) 玉 置 ⁹⁾ (1973)	—	19	男	—	1ヵ月以内	—	—
5) 安 田 ¹⁰⁾ (1978)	1977	27	男	左→右	3日	保 存 的 療 法	1ヵ月で完全治癒 右から回復しはじめる
6) 武 藤 ¹¹⁾ (1981)	1975	50	女	左→右	6日	保 存 的 療 法	右12日後治癒 左6ヵ月後スコア(50/100)
7) 北 條 ¹²⁾ (1982)	1981	45	男	右→左	4日	保 存 的 療 法	左3ヵ月後スコア(40/40) 右3ヵ月後スコア(38/40)
8) 井 野 ¹³⁾ (1983)	1982	27	男	同 時	0	保 存 的 療 法	35日後, 左右差なく治癒
9) 岩 永 ¹⁴⁾ (1983)	1982	45	男	右→左	25日	保 存 的 療 法 右 減 荷 術	左1ヵ月後, 治癒 9ヵ月後改善されたか, 右病的共同運動あり
10) 上 出 ¹⁵⁾ (1983)	1982	34	女	右→左	15日	保 存 的 療 法	右順調に回復 左治癒が遅延
11) 横 田 (1985)	1984	27	男	同 時	0	保 存 的 療 法	左5ヵ月後スコア(34/36) 右5ヵ月後スコア(30/36)

図4 両側同時性顔面神経麻痺の程度とその経過

いとなり、左右差が大きくなると片側性になると考えられる。しかし、このことは、片側性ベル麻痺のすべてが両側性に障害を持っていることを示しているのではない。

症例10は、発症間隔が15日と長く、しかも、c型の経過を示した特異な症例であり、上述の考えからしても、両側同時性ベル麻痺とするには異論があると思う。また、一方、養和田⁸⁾は、発症間隔が13日（4回目と5回目の間隔）の両側反復性ベル麻痺を報告している。これらのことを考えると、この症例も、非常に短い間隔で発症した両側交代性ベル麻痺と考える方が良いのではないかと思う。

両側同時性ベル麻痺の予後は、安田ら¹⁰⁾や武藤¹¹⁾によれば、比較的良好といわれている。表

2に示した症例の内、発症間隔が1週間以内の7例（症例1, 3, 5, 6, 7, 8, 11）についてみると、全例保存的療法を行ない、症例6以外の6例が予後良く経過している。このことから、両側同時性ベル麻痺の治療は、先ず、保存的療法を施行し、もし、減荷術を行なうならば、先発側に施行するべきであると考えられる。

著者らの症例において、閉眼時つまりベル現象の際に、眼球が左上方から上方へ動く現象がみられた。これは、初診時に閉眼不能であったため、眼振と間違えかねないものであった。このことは、藤田ら⁷⁾の症例2においても認められている。この所見が、ベル麻痺、特に両側同時性ベル麻痺において、どういうことを意味するのか、今後の研究が必要である。

ま と め

最近経験した、両側完全同時性ベル麻痺の1症例を報告した。あわせて、本邦における両側同時性ベル麻痺の報告を集計し、若干の文献的考察を加えた。

文 献

- 1) Hora JF and Elwell RH: Facial Diplegia. Arch Otolaryngol 83: 329~331, 1966.
- 2) 小林武夫, 新美成二, 他: 両側性顔面麻痺について. 耳喉 46: 17~23, 1974.
- 3) Rontal E and Sigel ME: Bilateral facial paralysis. Laryngoscope 82: 607~616, 1972.
- 4) 中村光士郎, 松本 康, 他: 両側性および反復性顔面神経麻痺の統計的観察—その1 原因について

- て. 耳鼻臨床 73 : 1673~1678, 1980.
- 5) 中村光士郎, 松本 康, 他 : 両側性および反復性顔面神経麻痺の統計的観察—その 2 ベル麻痺について. 耳鼻臨床 74 : 427~431, 1981.
- 6) 楠井賢造, 玉井宏昭, 他 : 末梢性両側顔面神経麻痺. 臨床と研究 35 : 1543~1546, 1958.
- 7) 藤田秀三, 梶原博毅 : 両側性顔面神経麻痺の 1 例. 広島医学 16 : 564~565, 1963.
- 8) 蓑和田寛子 : 両側性顔面神経麻痺の 4 例. 耳鼻臨床 60 : 525~532, 1967.
- 9) 玉置弘光, 杉山茂夫, 他 : 両側顔面神経麻痺症例. 日耳鼻 76 : 921~928, 1973.
- 10) 安田宏一, 池田雄祐, 他 : 両側同時性ベル麻痺の 1 例. 耳鼻 24 : 370~375, 1978.
- 11) 武藤次郎 : 両側同時性顔面麻痺の 2 症例. 耳喉 53 : 93~98, 1981.
- 12) 北條和博, 細川 智, 他 : 両側性顔面神経麻痺の 2 症例. 耳鼻臨床 75 : 1037~1045, 1982.
- 13) 井野千代徳, 花岡真子, 他 : 両側完全同時性ベル麻痺の 1 症例. 耳喉 55 : 1023~1026, 1983.
- 14) 花岡真子, 井野千代徳, 他 : 両側完全同時性ベル麻痺の 1 症例. Facial N Res Jpn 3 : 45~48, 1983.
- 15) 岩永迪孝, 山本悦生, 他 : 両側性顔面神経麻痺の 1 例 — 一側減荷術施行例. Facial N Res Jpn 3 : 49~52, 1983.
- 16) 上出一朗, 矢野原邦生, 他 : 両側同時性顔面神経麻痺の 4 症例. 耳喉 55 : 921~928, 1983.
- 17) Safman BL : Bilateral pathology in Bell's palsy. Arch Otolaryngol 93 : 55~57, 1971.
- 18) 小林武夫, 黄川田徹, 他 : ベル麻痺およびハント症候群の非麻痺側における筋電図学的異常所見. 臨床耳科 5 : 108~109, 1978.
- 原稿到着 : 昭和60年3月4日
別刷請求先 : 横田 昌也
〒640 和歌山市七番丁1
和歌山県立医科大学耳鼻咽喉科学教室